

## 後記

退職にあたり、本号の編集担当者からこれまでの筆者のアジア研究との関わりを一文に草するようにとの依頼をたびたび頂いた。しかし生来の怠けぐせもあり、また上記「研究動向」に記したいいくつかの小論でそれらしきものを書いたこともあり、どうとう体系的に書き下ろす機を逸してしまった。この点はお詫びとともに、今後の筆者に与えられた宿題として真摯に受け止めさせて頂きたい。

「本号特集にあたって」においても触れられているように、筆者は学部在学中に「アジア近隣外交を論じる前に」と題した私論を当時所属していた学生サークルの機関誌に寄稿したことがある。今読み返すと文字通り若気の至りの見本のような青臭い文章であるが、自分のアジア研究者としての原点を示しているのかもしれない、どの読後感に襲われたことも事実である。その意味で赤面の至りであるが、文章を原文のままの形で再録させて頂くことで、将来書く事になるかもしれない研究回顧の序とさせて頂きたいと思う。

## アジア近隣外交を論じる前に

### ——日本人の意識下にある人種的偏見——

（『土曜会報』第64号1964年6月所収）

近年、日本外交の三本柱の一つとしてアジア外交の推進が叫ばれている。東北アジアの一隅に位置する日本として、アジア問題の処理は宿命的な課題であり、現実の国際社会の中で、いかなるビジョンを持ってアジア外交を推進して行くべきであるかは官民一体となって考えていかねばならない問題である。

外交とは形式的には政府対政府の関係であるが、その底流に双方国民の信頼と理解がないならば、その関係は極めて不自然、不安定なものであることは歴史がくり返し教えている。然るに、いまだに根強く残っておりそれが日本のアジア外交の困難さの一端となっているのであるが、日本は明治以来欧米にのみ尊崇の眼を向けその反動としてアジアならびにアジア人に対してとかく上から見下す傾向があった。

その最も良い例が、日本人の朝鮮観・朝鮮人観である。アジアの一部の知識階級は日本がこれをどう処理するかをじっと見て日本を判断する材料にしたいともいっている。いずれにしても、われわれは世界の平和を論じアジアの安定と繁栄を唱える前に、このアジア人種観の是正に努めなければならない。これなくしてはいかに立派な条約、協定といえども砂上の楼閣に終ろう。そこで私はこの問題への接近としてもっとも卑近な日本人の朝鮮観に焦点をしばらく一つの示唆としたい。

昨年暮の韓国の民政移管以来急に妥結の気運が高まった日韓会談であったが、三月以降の予想以上に激しい韓国内の事態により、またまた無期限延長の憂目にあっている。日韓両国は今日の国際社会において政治的にも経済的にも民族的にも共存していくことが望ましいのはいうまでもないが、戦後日本人は朝鮮、朝鮮半島をとりまく国際情勢に意識的にか無意識的にか余りにも無関心でありすぎた。だが最近の一連の動きによって日本国内に漸く対韓認識が強調され、国民の眼が玄海灘の彼方に向けられるようになったことは当然とはいえ極めて喜ばしいことである。

併せて在日朝鮮人の存在にもかなり関心が持たれ始めてきた。日本人の朝鮮観を論じる場合、在日朝鮮人問題は、本来切り離して考えるべきであるが、日本人はこれを同一視して考えるようになって

いるため、まず在日朝鮮人問題に眼を向けることから始めなくてはならない。これら約六十万の在日朝鮮人は巷間いわれるように犯罪率は日本人の六倍と極めて高い。この数ヶ月間たびたび新聞の社会面を賑わしていることも確かである。そしてわれわれは昔からの半島蔑視観とこれとを結びつけて朝鮮人を劣等民族、極悪民族の代名詞としてしまう傾向が強い。従って日韓交渉の相手国たる韓国に住む人々をも、色メガネを通して見た在日朝鮮人の拡大像としのみ捉えようとする。そのため韓国内の絶えず激動してやまない情勢をも、その韓民族性悪説の立場からいとも安易に解釈し首肯するというのが今の一般日本人の姿であろう。

そこで私は日本人が対韓関係を正常化し、それによって心からアジアの安定と繁栄、ひいては世界の平和を希うならば、在日朝鮮人問題とは何か、ということをはっきり自覚することからスタートしなければならない。論理の飛躍といわれるかも知れぬがそれなくしての世界平和云々は偽善といわれても仕方あるまい。結論を先に述べるとこの問題を日本社会の精神的二重構造の一つとして捉え、日本人がはっきりと意識の上でのせ見極めるべきなのである。

かくいう私も昨年たまたま三日ほど釜山に滞在する機会を持つまでは、この問題に対し何の関心もなければ知ろうという欲求もない日本人の一人であった。だがその日以後韓国問題ならびに在日朝鮮人問題は私にとって看過するには余りにも大きな重圧としてのしかかってくるようになった。初めて夕暮時のうら寂しい釜山の土をふんだ日、今までの偏見にみちみちた朝鮮観が怨霊となって私を殺しにかかるのではなからうかなどという強迫観念にとりつかれて歩き回ったのがおかしく思い出される。不快な体験もしたが、それ以上に少数ながら接し得た韓国人青年たちとの語らいが脳裡にやきついている。今でもこの問題を考えるたびに去年の六月の小雨ふる釜山の港での光景がなつかしく思い出される。濁酒を飲みながらアリランを歌い幾分感傷的になって日韓友好を語り合った夜が……。

この暖かい彼らが、われわれが今まであれば理由なしに毛嫌いしていた朝鮮人であったのだ。この衝撃は忘れようにも忘れられない。ところが日本に帰ってきて、又一部の在日朝鮮人の行為を見るにつけ聞くにつけ以前の感情が戻ってくる。だが以前は無条件で通過したその感情が今度はためらいがちになった。心に葛藤が生じてきた。

この在日朝鮮人の問題は、日本社会の病巣として放っておけばおだけ悪い毒をもたらすものに思える。何とか大手術をしてウミを出してしまわなければ国際社会における日本の地位を著しく下げることにもなりかねない。アメリカの黒白問題を日本で演じてはならない。

日本の知識人はこの問題に対しては日頃の知的訓練も陰をひそめくさいものにはふたをしるの論理に支配されているのではなからうか。

戦前、朝鮮各地から来往した彼らは軽蔑の目で見られながらも、日本国籍を有する日本人として法律上の権利義務があった。実質的には社会的差別待遇はあったが法律上は対等であった。ところが戦後わが国は朝鮮人でも日本人でもないいわゆる「第三人」として彼らを扱った。更にサンフランシスコ条約締結日をもって日本国籍喪失を確認した。政府はこの点を「大韓民国戸籍法を尊重して……」としているが当時の在日朝鮮人六一万名中大韓民国の戸籍法の適用をうけるべく韓国代表部に登録を済ませていたのは一二万名であり従って他の四九万名から一方的に国籍を取り上げたことになる。

従って日韓会談法的地位委員会が大筋において合意している在日朝鮮人に対して「永住権」を与え

ることも、それは在日朝鮮人問題への抜本的な解答とはならない。たとえ永住権の適用をうけても(サンフランシスコ条約発効以前からの在住者と法的地位協定発効までに日本で生れた韓国人に対して)日本側のあくまで彼らとは一線を画すとの方針から参政権と公務員資格閉鎖の状態が存続するわけである。

現在五八万余名といわれる在日朝鮮人が本当に欲しているのは、そうした政府間の取り決めによる措置ではない。彼らが韓国か北鮮に帰る機会を今までに充分与えられながらその大部分が帰国しなかった事実から判然とするように、現在彼らは日本で生活を求め、日本社会に同化したいと熱望している。(将来が不安な帰国よりも苦しいながらも現状維持をとりたいたいの保守的性向もあるが。)

ところが、われわれの社会はこれに対してもすれば消極的になりがちである。彼らの内、三十歳以下の労働人口層が四十万名に達しているのに彼らに対し就職の道を固く閉ざし場合によっては進学すらもさせないという歪んだ現実は一切どこから来ているのか、われわれは日本社会の病気としてじっと見つめる必要があるのではないか。勉強したい、働きたいという意志と能力を持ちながら、しかも日本語をしゃべり、書き、日本の社会のみしか知らない彼らがただ韓民族の血が流れているという一事によってわれわれの社会から締め出されている不合理を黙認して好いのだろうか。

このような無機物視された在日朝鮮人一殊に日本人でありさえすれば非常に有能な素質を持っている何割かの青少年—はこれから先どういう反作用をわれわれに及ぼすであろうか。その一つの示唆として思い出されるのが先年の小松川事件の犯人李鎮宇の生涯である。又南北朝鮮の代弁的役割を果している民団と総連の動向も場合によっては社会不安の温床とならないとも断言できない。更にはこの状態の存続が、将来彼らの祖国とのトラブルの要因となる可能性も大いにある。今の韓国学生の反日運動もわれわれの在日朝鮮人観=韓国人観と無関係とは思えない。

日本の知識階級は半世紀前、日本社会の胎内に宿る不合理、非近代的な存在「部落問題」に眼を向けた。だが結局何もできなかった。二十世紀後半の知識人は前の轍をふんではならぬ。又彼らの不安定な地位が、部落問題が既に陥っているごとく左翼陣営の統一戦線の一環として利用されることを許してはならない。しかし現実はその動きが北鮮—総連—日本革新陣営のラインとしてかなり明確にできてきていることは遺憾ながら事実であってこれは社会不安を増す以外の何物でもない。中根千枝氏によれば、日本の社会構造は「資格」よりも「場」を重んじる社会であるという。

それは別な見方をすれば封鎖的社会であることにも通じよう。A社の社員がB社に移ることが容易でないごとく、朝鮮人が日本社会に同化することは偏見も根強く困難も多い。

だが二十世紀後半の時の流れは日本人、朝鮮人の関係に限らず世界にまだまだ残存する人種的偏見という亡霊を、いつかはきれいきっぱりと流してくれるだろう。われわれもその歴史の流れの中で、個人個人方向を見間違ふことなく、より良き秩序を作り出していくことに努めなければならない。

\* \* \*

筆者が40年間の早稲田生活をどにかくにも何とか無事に終えることができるのは、日本内外、そして学内外の今は物故された方々を含むあまたの有縁の人々のお力添えの賜物にほかならない。そのことについては、昨年上梓した『東南アジアから見た近現代日本』の「あとがき」でも述べさせて頂いたが、その謝辞の一部を加筆修正の上、筆者の退職の辞として掲げることをお許し頂ければ幸いです。

1965（昭和40）年学部卒業後、インドネシア研究を志した当時（最初の勤務先アジア経済研究所で半年間の新人研修後、筆者がインドネシア研究担当を命じられたのは、あの「9月30日事件」発生の翌日であった）、故増田与先生（早稲田大学）から受けた公私にわたる熱いご指導は今なお筆者の臉に焼きついている。研究者として最も充実したお仕事を重ねられているさなか病魔に倒れた故永積昭先生（東京大学）、同世代の故土屋健治氏（京都大学）からは研究者として大切なエトスを学ばせて頂いた。また二〇代のときから今に至るまで同学・同世代の友人としてそのお仕事や交友を通じ多大の刺激を与えて頂いている村井吉敬氏（早稲田大学）、倉沢愛子氏（慶応大学）、加藤剛氏（京都大学）、原不二夫氏（南山大学）、波多野澄雄氏（筑波大学）にも謝意を表したい。また筆者の研究の視野を広げる上で国際関係学・アジア研究を先導された故細谷千博先生（一橋大学）、入江昭先生（ハーヴァード大学）、慶応大学の池井優先生、山田辰雄先生、明石陽至先生（南山大学）、我部政男先生（山梨学院大学）加藤幹雄先生（国際文化会館）、松尾文夫先生（共同通信）から受けたご厚誼と学恩も忘れがたい。同じ早稲田のキャンパスでは、自由闊達な学風の中で所属を越えて公私に親しく交流させて頂いた平野健一郎先生、安在邦夫先生、岡澤憲美先生、堀真清先生、勝方＝稲福恵子先生、そして大学院アジア太平洋研究科の創設以来、苦楽を共にした西川潤・小林英夫・白石昌也・村嶋英治・山岡道男先生はじめ同僚の諸先生にも改めて謝意を表したい。

早稲田大学在職中の前半25年は社会科学研究所、文学部・文学研究科で東南アジア研究を志す“ハングリー精神”旺盛な学部生・大学院生と接することができ、大きな喜びであった。後半15年は早稲田で最初の独立大学院アジア太平洋研究科で世界各国からの留学生も交えきわめて刺激に富んだキャンパス生活を送ることができた。日本・アジア関係を共通テーマとする修士課程・博士課程のゼミはきわめて国際色に富み、日本、韓国、中国、台湾、モンゴル、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、スリランカ、トルコ、そしてアメリカ、ドイツ、ハンガリー、ベルギー、オランダ、スウェーデン、さらには「在日」朝鮮人・韓国人と、さながらミニ国際社会の感があった。博士号を取得した新進・中堅研究者も10数名に達し、その学位請求論文を踏まえ学術書として刊行した人も8名を数える。若き学徒に対する賛辞とエールをこめ、以下にその書題等を紹介させていただくことをお許し頂きたい（刊行年順）。

高橋孝代『境界性の人類学——重層する沖永良部島民のアイデンティティ』弘文堂、2006年、馬場公彦『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社、2010年、鄭根珠『日韓関係における歴史認識問題の反復——教科書問題への対応過程』早稲田大学出版部、2011年、金恵京『テロ防止策の研究——国際法の現状及び将来への展望』早稲田大学出版部、2011年、菅野敦志『台湾の国家と文化——「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房、2011年、同『台湾の言語と文字——「国語」・「方言」・「文字改革」』勁草書房、2012年、小林真生『日本の地域社会における対外国人意識——北海道稚内市と富山県旧新湊市を事例として』福村出版、2012年、紀旭峰『大正期台湾人の「日本留学」研究』龍溪書舎、2012年、小川忠『戦後米国の沖縄文化戦略』岩波書店、2012年。また文学研究科博士後期課程を満期退学後オランダ・ライデン大学に提出した学位論文を踏まえた著作として太田淳 *Changes of Regime and Social Dynamics in West Java: Society, State and the Outer World of Banten, 1750-1830*, Brill, Academic Pub, 2005がある。さらに博士課程在学時代の紀旭峰氏と羅京洙氏との共同研究の成果として解題を付し

て大正期の貴重な雑誌『亜細亜公論・大東公論』（全三冊）を復刻できたことも特記しておきたい（龍溪書舎，2008年）。

教育に携わるものとしてとりわけ喜ばしいことは、これら学位取得者の著作がそれぞれの関係学界においても一定の評価を受け、これまでに『境界性の人類学』『戦後日本人の中国像』『台湾の国家と文化』、そして *Changes of Regime and Social Dynamics in West Java* の4点が、各々第35回伊波普猷賞（2008年度）、第28回大平正芳記念賞特別賞（2012年度）、第33回発展途上国研究奨励賞（2012年度）、第4回東南アジア史学会賞（2006年度）を授与されていることである。

最後になったが、本号に過大な「巻頭言」をお寄せ頂いた篠原初枝研究科長、編集に際し貴重な助言を下された村嶋英治前研究科長をはじめアジア太平洋研究センター・同研究科の教職員の皆様からの有形無形のご支援に衷心より謝意を表したい。また本号にお忙しい中貴重な論考を寄せて頂いた執筆者、そして細心の注意を払って煩雑な編集業務をこなされた本号編集委員会（代表 馬場公彦氏）に心より感謝を申し上げたい。

湯けむりに われ解き放つ 寒のあけ

2013年2月7日 退職にあたって

後藤乾一